
二人で明りを灯す場所

高島津諦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人で明りを灯す場所

【NZコード】

N9859X

【作者名】

高島津諦

【あらすじ】

みんなに好かれる日曜日と疎まれる月曜日を擬人化したら可愛いんじゃないかなうか、といつお話です。Arcadiaにも投稿しています。

居場所というのは、とても大事なものだ。

多くの人は、必死に探して、もしくは作り上げて、何とか自分の居場所を手にするのだろう。そしてそれを、大事に大事に守つていのだ。それならば、何の苦労もなく居場所を与えられておきながら、自分でそこに居づらくなつた私は、とんでもない愚か者だ。

学校の勉強ができるから、ちょっと厚い本を読むから、というだけで、妹の日は私を頭がいいと言う。けれど私は、そういう所ではない、もっと根本的に大事な部分で酷く頭が悪いのだ。馬鹿は死ななきや直らない、という言葉があるが、直る馬鹿と直らない馬鹿があると思う。日の、勉強が苦手で直情気味な所なんかは直る方の馬鹿で、私の愚かさは直らない方の馬鹿に違いない。

十五年付き合つた自己嫌悪にもいい加減飽きているけど、止められそうもなかつた。

「用ちゃん、お風呂空いたよー！」

ぽかぽかと、気持ちよく温まつたのだろうなということが分かる声で名前を呼ばれ、私は意識を内側の海から引き上げた。

「あ、う、うん……」

恐らく浴室までは聞こえないであろう声量で返事をして、居間のソファーから立ちあがり、壁にくつついているお風呂の操作パネルに近づく。ピ、ピ、と小気味いい電子音を立てて操作。三度湯温を上げて追いだきする。我が家の中では、パソコンの次に最新機器。幾らかかったのか両親は教えてくれていなくて気にならないこともなかつたけれど、とりあえず私にはありがたい設備だった。

「もー」

「きひつー！」

突然背後から湿り氣と熱のあるものに密着され、声が漏れた。え、えと、ああ、田、だ。

「あつこお風呂は体に悪いんだよー」

こいつの間にやつてきたのか、パジャマ姿の田が、私の背中に貼りついていた。服越しにも体中が柔らかくて、所々接触している素肌が火照つていて、私の頬に当たる髪が湿つていて、お風呂上がりの香りがして、私は一つ、睡を飲み込んだ。

「田が、ぬるすぎるんだって」

それでも少し掠れてしまつた声で、私は身じろぎひとつせずに抗弁する。

「でも田ちゃんは熱すぎー、四十一度にしなさい四十一度にー！」

田の腕が伸びて、勝手に一度引き下げられた。そんな風に私の肩越しに腕を伸ばされると、ちょっと腕を曲げられただけでまるで包み込まれるように抱かれそうで、それが、私は、何だか、そう、怖かつた。

「……くつつき、すき」

ぐい、と田の腕を押しやつて、私は逃げた。逃げた？ うん、逃げた。押しやる仕草があんまりに邪険だつたんじやないかと気付いたのはその後で、けれど田はいつも通り氣にした素振りもなく、

「あー喉カラツカラ。今度からお風呂に何か持つてこうかな、ほら、温泉番組なんかで露天風呂にお盆浮かべてトックリ乗っける感じですか。風流？」

なんて言いながら、台所へ飲み物を取りにいってしまったから、テレビを見ている父さんも本を読んでいる母さんも何も氣にしない。

私は少し立ちすくんで、そして、まだお風呂が私の適温になつていないと分かっていたけれど、浴室へ向かった。ぬるすぎるお風呂の方が、田の温かさに触れているよつまだよせうだつた。

昔から、田は毎日に行つたつて、上手に呼吸ができるよつだつた。

家でも、幼稚園でも、学校でも、苦手な勉強でヒーヒー言つてる時
だつてそれは変わらなかつた。

逆に私は、喘息でも何でもないのに、深い水底の水圧が肺を締め
上げているような、そんな気がいつもしてた。水圧の正体は多分、
誰かの視線、といつようなもので、要するに私は自意識過剰だつた
のだろう。

考えすぎだよ、誰も君のことなんかそんなに気にしちゃいないよ、
まして嫌つてなんかいないよ。幼い私に誰かがそう言つてくれれば
何か変わつたかもしれないし、あくまで私は私だつたかもしれない。
いざれにせよそう言われなかつた私は考えすぎて、ずっと考えすぎ
て、そうすると不思議なことに、私の中だけで考えていたはずの内
容が現実のものになつた。実際に皆から嫌われるよつになつて、私
はますます息をするのが苦手になつて、ぎこちなくぎしきし生きる
私は更にキモチワルイモノとして扱われるようになつていつた。体
に長く傷が残ることがされていないのは、幸いだつた。

ただ、日といふ時だけは、違つた。私という不格好な形をしたも
のが、しつくりと嵌る気がした。日は誰とでも仲良くやれる、凄く
まともな形をした子のはずなのに、私みたいな形の人間と力チリと
嵌るのがとても不思議だつた。双子に特別性があるとすれば、まさ
しくそうなのだろう。

日の隣だけは、生まれた瞬間に神様から「えられた、私の居場所
だつた。

日は誰といても大体楽しそうにしていてる子だつたけれど、私との
時は、特に楽しそうにしていてくれた、と思う。私は人の気持ちを
察することもとても苦手だけれど、日の気持ちだけは、少し分かる
気がする。日が私の重く長い髪を梳かしたり、コンビニであんまん
をはんぶんこして食べたりする時の笑顔は、他の笑顔とは違つてい
た、はずで。日は今だつて、私といふと楽しそうにして、特製の好
意を思い切り向けてくれる。日は変わつていない。

変わつたのは、私だ。だから、悪いのも、私だ。

湯温が上がるまで湯船に入り続けたりしたせいでのぼせた頭で居間に戻ると、日はいなかつた。子供部屋に行つたのだろう。父さんと母さんは、テレビのニュースなんだかバラエティなんだかよく分からぬ番組を見ながらおしゃべりしていた。

さつきの日の行動をなぞるよつに、私も台所に行つて冷蔵庫を開ける。日はきっと牛乳を飲んだのだろう。私は「コーラのペットボトルを取りだして、日とお揃いのコップに注ぐ。

私がこりこり飲み物を好むのを、日はよく諌める。私は聞く耳を持たない。骨だらうと歯だらうと溶けるなら溶ければいい。「力が入つていればもつとよかつた。大人になつたらお酒も煙草も思うままやりたい。ああでも煙草の匂いをさせるよつになつたら日は嫌がるだらうな、と反射的に思つて、その思考が口の中に生じさせた苦みは、想像上のアルコールとタールに似ていた。

「コーラを一杯飲み干し、もう一度注いで、部屋に向かう。子供部屋は共用だつた。日がこるといつことを恥づと少し足が鈍つたが、やらなければならぬ宿題があつた。

部屋に入ると、日はベッドに寝転んで漫画を読んでいた。男の子みたいな、少年漫画。

「用ちゃんおかえりー」

気配に顔を上げて、笑つてヒラヒラと手を振る日に、私は疑問をぶつける。

「……なんで、私のベッドで？」

私たちが使つてゐるのは一段ベッドで、上が日、下が私。なのに今、日がうつ伏せになつてゐるのは下の、私のベッドだつた。

「落ち着くから」

一言で返される。一問一答としては申し分ない答えなのかもしけないけれど、それは納得には遠い。とりあえず「コーラの入つたコップを自分の机に置いてから、もう一度日を見る。

「落ち着くつて……自分のベッドの方が、落ち着く、もんじょ」

「違うよー」

当たり前のことと言つたつもつだつたから、否定されるとは思つてなかつた。

「いや、あたしのはあたしので落ち着くんだけど、月ちゃんのベッドは何ていうか、ほつとするんだよね。月ちゃんの匂いがして」

「な、何、それ」

「さびしくない、みたいな気持ちだよ

「一二二二と笑う日は確かに寂しくはなさそいで、でもそんな理由で私のベッドに寝てこるのなら、寂しかつたの？ 何で？

「ね、今夜さ、ベッド交換して寝ようよ。そしたら月ちゃんも分かるよ」

その提案に、私は少し黙つてしまつた。日のベッドで寝る。多分、日の匂いがする。他にもきっと、日の色なんものが、夢の欠片だとか、存在そのものだとかが、染み付いているのだろう。

「多分すぐ眠れるよー。あたし、月ちゃんのベッドでお昼寝するとあつとこつ間に寝ちやうもん」

それが本当だとしたら、寝付きの悪いことが悩みの私にとっては、魅力的だけれど。というか、今まで昼寝に使われていたのか。

「いいでしょ月ちゃん？」

悪意なんて欠片もない表情で聞かれて、私は。

「……ダメ」

首を横に振つた。前髪がまつ毛をこすつてチカチカする。視界に紗がかかる。

「えー」

日は頬つぺたを膨らませた。子供っぽい仕草だが、日こなよく似合つてゐる。そんな仕草の似合つ子は一部の女子からは嫌われやすいものだけれど、日は不思議とそんなことはなかつた。

普段の日なら、これで話は終わつたと思うのだけれど、今日は少ししつこかつた。不満気な表情を一転、ナイスアイディア、なんて

風に輝かせて、

「じゃあさ、円ちゃんのベッドで一緒に寝よつよつ」

「嫌」

拒绝の言葉は、のぼせてスカスカになつた頭を通り抜け、私が思つた以上に真つ直ぐと口をついて、時速343kmで日にぶつかつた。

本当に好きな相手に対し意地悪をするほど子供ではないつもりだけれど、スマートに好意を伝えられるほど大人でもないのが、私の沢山ある嫌な所の一つだった。

大人（果たして彼らがどんな生き物なのかいまだに私はよく分からぬ）に言わせれば、「まだ中学生なんだからそんなもの」となるのかもしれないけれど、三年生ともなれば、大人に近い振る舞いを身につけ始めたつていい、はずだ。でも私は、他の色々なことと同様に、上手くできやしなかった。

そもそも、笑顔で人にあいさつをすることからしてまともにできない私が、スマートな好意表現なんてできるわけないんだけれど。何かの奇跡でできたとしても、疎まれるだけなんだけれど。

日の他人への、私への好意の向け方が、大人びたスマートなものではなく、わざと意地悪する幼稚さにすら違しない、ひどく子供じみた過剰な素直さからくるものだったとしても、それはやはり美德なのだと思う。その美德が、私は妬ましかつた。

日は、ずるい。日は私が好きだといつも言つて、それは私も嬉しいで、でも彼女の好きは、私たちがにっちゃんひとつーちゃんだった頃から変わらない「好き」なのだ。

私は、変わつてしまつた。わたしはよこします、と頭の中で呴いて、邪、の漢字を当てる。それはとてもよく似合つた。学校で私のことを魔女と呼ぶ人たちがいるのを知つていて、日はそれを聞くたび怒るけれど、でも、口さがない彼女たちの方が正しいのだろう。

私は、邪な魔女に変わってしまった。しかしそれは悪いことなのだろうか。につちゃんのことを日と呼ぶようになり、テストの点数を競うことを知り、口が痛いだけだった炭酸飲料を愛飲するようになり、それでも変わらないなんて、不可能でしょう？ 好意の伝え方が分からなくなつたつて、居場所だったはずの日の隣にいると動搖して逃げ出したくなつたつて、仕方ないでしょう？

けれど、やっぱり、悪いのは私なのだろう。私たちは、姉妹で、双子で、女同士なのだから。邪で、悪くて、なるほど、邪悪なんだ。邪悪だから、日に、こんな表情をさせてしまひ。

私の言葉をぶつけられた日は、円らな目をますます丸くして私を見つめ、そしてふ、と目を伏せた。けれどそれですら、真正面から見つめられるよりも気が楽になつてしまつ私は、傷つくより傷つける方がずっとマシだと感じる人間なのだろう。

「月ちゃん……あたしに触られるのとか、ほんとに、嫌なの？」

少しだけ眉間にしわを寄せ、眉を下げたその表情は、不安を示していた。日の表情は分かりやすい。それは、いつだって、誰にだってそう。でも、一番分かるのは、私だと思っていた。信じていた。

「前は、嫌つて言つても、本当は嫌がつてないなつて分かつたけど。最近の月ちゃんは……どつちか、分かんない」

昔、日が言つたことを思い出す。「地球からは月の同じ側しか見えないって言つけど、あたしはお日様だから、他の人が分かんない月ちゃんの裏側も分かるんだよ！」なんて。根拠のない言葉だ。受け取り方によつては傲慢ですらあるかもしれない。でも私は、こう言われた時確かに嬉しかつた。私と日が、お互にお互いのことを一番分かりあえる関係のようだ。

けれど、どうやら、最近の私の嫌がつている振りは、知らないうちに随分と上達していたようだ。日をすつかり騙せてしまつていても、振りなのだから。私が、ただ、子供にも大人にもなり切れて

いないと言つだけなのだから。だから日、そんな顔しないで。

日には悪いけれど、彼女がこうして不安に耐えかねてくれたのは、丁度よかつたかもしだい。こんなことでもなければ、私は嫌がつているふりを続けていたろう。居場所を失つたままになつていたろう。でもこれで、そこから抜け出せる。やつぱり私はどんな時だつて日に引っ張つてもらえる側みたいで、しかしそれもいいんだろう。ほり、首を横に振つて。凄く恥ずかしいけれど、きっと声はとても小さくなつてつつかえてしまつだらうけれど、本当は嫌じやないつて言おう。ごめん、つても言おう。そうすれば、また私は、日の隣で、少しだけ楽に立つていられるようになつて、日の手を取つて、時には日と同じベッドで寝て、そして。

そして、その先は？

「……もう、ベタベタするの、やめて

邪悪な魔女に、居場所なんてあつていわけがなかつた。

「豆電球だけがついた中で、私は上段ベッドの裏側を見つめていた。部屋の中に音はしない。時計も、私が音が気になつて眠れないと言がままを言つて針音のしないタイプに変えてもらつていた。

それでも、普段なら音がしているはずだつた。日はとても寝相が悪い。毎晩毎晩、上のベッドからはギシギシだとか、酷い時はドタンバタンという音がして、底が抜けるのではないかと私は気が気がではないのだ。けれど今夜は、とても静かだつた。

あの後、日は、ちょっと黙つて、「そつ、かあ」と言つた。棒読みみたいな奇妙な言い方だつた。どんな顔をしていたかは分からぬ。私は斜め下を見ていたから。ギシ、と音がしたので、私のベッドから降りたのだろう。歩き出した氣配がしたので恐る恐る視線を上げると、日は自分の本棚に向かつていて、私からは背中しか見えなくてほつとした。そのまま日は本棚を物色し始め、「月ちゃんごめんね。これから気をつけるから」と、今度は普段通りの明るい声

で続けた。何冊か漫画を抜き出し、振り向いた日の動きに今度は視線を逸らすことが間に合わず、顔を見てしまった。何てことのない笑顔だった。気楽そうにしか見えない、笑顔だった。

それから私は宿題をしたし、日は自分のベッドで漫画を読んでいた。日だって宿題があつたと思うけれど、私は何も言わなかつた。日も何も言わなかつた。日が欠伸をして、私が「そろそろ、寝ようか」といつものように聞くまで、一人とも、何も言わなかつた。

深く呼吸をすると、枕から、少しだけ日の匂いがする気がした。それはコカインやニコチンやアルコールに似ている、と一瞬考え、すぐに否定する。むしろ水や酸素や塩に近い。日は私に必要だつた。たとえそれが摂りすぎればドラッグと同じ結果を引き落とすとしても、必要だつた。でも、私はそれを拒絶した、のだ。

小説なんかで、人間関係が壊れる時に「ガラガラと崩れる音がした」なんて書かれるが、どうやらそんなのは嘘つぱちのようだつた。暴力沙汰にでもならない限り、概ね静かに壊れる。今のこの部屋のようには、静かに。

日のことを考える。日のことしか考えられない。擦り寄せてきた頬の柔らかさ。絡めた指の細さ。引っ張る手の力強さ。人懐こいふわふわの声。私に向けられる唯一の「好き」。それを全部振り払つたことを考える。仕方がないのだ、仕方がないのだ。綺麗な物を汚してはいけないなんてこと、誰だつて分かる。だから。

かみさま、どうしてわたしは、よこしまなのですか。

目を閉じなければならない。明日も学校がある。日常は続いていく。眠ろう。ちつとも眠くないけれど、眠ろう。

私が意識を失うまで、上のベッドが軋む音は聞こえなかつたように思う。

「月ちゃん、つーきーちゃん」

鼓膜の振動と体の振動に、私はうつすら目を開けた。ぼんやりし

た視界に、何だかよく分からない、でも見慣れている気がする物ばかりが映る。

一緒にいた?
おはよう、田ちゃん

私の右肩を遠慮会釈なく揺すつていた何かが離れる。

卷之三

習慣として、脳をほとんど使わずに返事をする。

「その言い方はまだ起きてないな！」用ちゃん、おーきてー！」

元気な声と共に、再びゆさゆさと体が揺さぶられた。力の入る

し首が力欠けた揺れて少しす一意識が浮上していく。今私はヘッドに寝ていて、寝起きで、起こされていて、ぶれる視界の真ん中刃つ二一るのば、瑠璃がつて一るのば、田。

「兩漢一通」之研究

「」

「アーニー、アーニー、アーニー」の繰り返し声が聞こえた。

挨拶だけを交わした。

「早く」餉食へないと怒られるよ」

「さくに離れて、軽い足音を立てて部屋を出て行った。

取り残された私は、少しはうそとして、取り残された。

いふ自分に気が付いた。昨日までは、部屋を出る所まで一緒にいたの
が、今日では、お部屋から出る所まで一緒にいたの

きついてきていた。その度に私は、口に全て触れられて、我慢をしていたのに。

日が寝起きの悪い私を起こす役、というのは変わらないけれど。私たちが双子ということは変わらないけれど。決定的に、変わってしまったのだろう。優しい日は、えてくれたのだ。

ずっと上手に田は距離を取つてくれそうだ。田は明るさや素直さから皆に好かれているとばかり思つていたが、実際はこういう距離の測り方も上手いから好かれていたのだろう。それを今まで知らなか

つたのは、いつそ不思議なことだつた。私たちはもう十五歳で、全
身で体当たりすることしか出来ない子が誰からも好かれるわけがな
いのは当たり前だ。田は多分天賦の才能で、取るべき距離を上手に
取ってきた。今日まで私に対してもそれは必要なかつたけれど、もう
違つのだ。ほら、昨日まではちょっと触れられただけで焼きついた
ようだつたのに、今は触られたかどうかも忘れてしまいそうなほ
ど自然に触れて離れていたじやない。

もぞもぞとベッドから這い出す。毎朝、この寒さが体を覆う瞬間
が苦手だ。今朝は特に寒かつた。

洗面所で無様に水を跳ね散らかしながら顔を洗い、居間にに行くと
いつものように既に家族は朝食を摂り始めていた。両親におはよう
を言つて、田の隣に座つて、私も食べ始める。

いつだつて朝は食欲がなくて、無理やり食べ物を口に入れ、何も
考えないように咀嚼して飲み下す。他の家族は主食がご飯で、私だ
けパンにしてもらつてているけれどそれでも辛い。血圧も体温も低い
のは、私らしいと言えばらしいのだろう。田は血圧が平常値で体温
が少し高めで、それもらしこことだつた。

義務としての朝食を終え、身支度を整え、私たちは家を出る。田
と一緒に登校。

「田ちゃんとい、今日体育ある?」

柔らかな栗毛を揺らした田の話の振り方はとても自然で、私もそ
れなりに自然に返すことができた。

「ある、よ」

「いいなー」

本気で羨ましそうな、少し拗ねたような、その仕草はびしきつ
もなく可愛い。

「よくないよ……疲れる」

「田ちゃんは運動の楽しみを知った方がいいよ。手も足も細すぎ

！」

それなら口は勉強の楽しみを知つたら、と言おうかと思つて止め

た。別に私だつて、楽しくてやつているわけではない。それしか人並みに出来る物がなくつても、決して楽しいわけではなかつた。

通学路を歩いていくと、次第に同じ制服を着た子たちが増えていく。日に声をかける子は沢山いて、私に声をかける子は一人もいない。私は、存在を無視されるか、人気者を独占する邪魔な奴として疎ましげな視線を向けられるだけ。これまで通り。

私を無視する方のグループの一つに、日が近寄つていつて何か話し始めたのは、これまで通りではなかつたけれど。きっと今日からはこれが普通になるんだな、と私は洞窟の奥の湖みたいな心で見ていた。

細すぎると言いながら日が手にも足にも触れてこなかつたことに、その時になつて辛うじて気付いた。

どうということもなく日常は続いていつた。

学校では日とクラスが違うので、元々関わりは少ない。私は三年一組で冷え冷えとした視線に包まれていたし、日は三年四組で笑顔の中心にいたことだろう。変化と言えば一緒に食べていた昼食が別々になつたくらいで、それを最初に切り出した時の日はやつぱりふうわりとしていて、私はちつとも動搖しなかつた。下校は今まで帰宅部の私が陸上部の日を待つていたけれど、特に予告もせず私はさつさと一人で帰るようになつたし、日も何も言わなかつた。

家の会話は、ゼロではないにせよ、そして険悪な雰囲気は一切なかつたけれど、減つた。一度、母に「あなたたち喧嘩でもしたの？」と聞かれたが、日の鮮やかな否定でその疑惑は晴れたらしかつた。客観的に見て、こういう風になつてもおかしくない年頃、といふことだつたのだろう。そして、朝起こしてくれる時以外、日が私に触れることはほとんどなくなつた。

私が一言望んだとおりに、日はベタベタするのをやめてくれたのだ。

意外にもと言うべきか、期待叶つてと言うべきか、私は一週間を待たずして心穏やかになつていて。日は私にとつて掛け替えのない、必要な存在だと思っていたが、とりあえず毎日言葉を交わすだけでは私はよかつた。かつてのような親しさは、やはり私の心を乱していたのだ。日のことが嫌いになつたわけでは勿論ない。ただ、節度を持つことが、持てることが、心地よかつた。

日にとつてはどうだつたかなんてことは分かるわけもなくて、でも日にとつて私はワン・オブ・ゼムで、私にとつて日がオンリーワンという不均衡な関係が私たちだつた。ネックなはずの私が気が楽になつっていたのだから、日の方が居心地が悪い道理はなかつた。事実、私ということで浪費していた時間を他の子たちとの交流に使うよつになつて、日はますますキラキラして見えた。

まったく、お互い、双子だからなんて理由で、無駄なことをしていたものだ。私と日は、全然種類の違う人間なのだから。

空に浮かぶ月が一度満ちてまた欠けた。

地上に沈む私はそんな風に変化することもなく、淡々と日々をこなしていた。毎日は嬉しいことがほとんどなく嫌なことばかりで、でもそれが私にとって生きるということだつた。大丈夫、平常運転だから。なんて、そんなことをわざわざ言わなければならぬ相手もいない。

いつかのように、いつものように、日はベッドで漫画を読み、私は机に向かっていた。勿論日がいるのは自分のベッドだ。もう日と同じ部屋にいても、胸がざわめくことはない。厳密に自分を観察すれば、少しだけ息苦しい気もしていたけれど、それは世界のどこにいたつて感じているようなものだつた。そしてそれは錯覚にすぎない。私の呼吸器に障害はない。日が上手に呼吸ができて私ができないなんてのは陳腐で甘えた比喩であつて、実際の私は、私一人で、健常に呼吸ができるのだ。

その時の私はカッターを使っていた。定規に沿って、真っ直ぐ切るだけ。私でもできる簡単な作業。息を止めて、もつ一本、線を。するりと定規がすれたのを認識した瞬間には、もつ鋼製の刃が私の左親指の上を通過していた。

「あっ！」

痛みよりも先に驚きで声を上げた。普段も「いもい」としゃべっていると咄嗟の叫び声まで小さかったりするが、同室の彼女は聞き逃さなかつた。

「大丈夫！？」

ひょっとすると私よりも焦ったみたいな声で、半ばベッドから飛び降りるような音を立てて駆け寄ってきた日の反応は、まるで予測していたみたいに随分と早かつた。それに驚いて固まってしまった私の左手首を、すぐ横に立つた日がグッと掴んで持ち上げた。

その時にはもう、第一関節の辺りから、とくとくと赤いものが流れ出していた。疼くような感覚はあつといいう間に痛みに育つた。

「気をつけなきゃダメだよ！」

傍らからの声は叱るようでいて、何より心配の色が濃かつた。

「い、ごめん……」

でも叱られていっても心配されていても、謝ってしまう人間が私だつた。茫然としたままの私に先んじて、日は机の上のボックステイシューから何枚も引き抜いて、傷口に押しあてた。重ねられたティッシュがすぐに全部赤く染まるほどの出血があるわけもなくて、そう考えれば日は動搖しすぎたのだろう。でも私はそんな風にも思えないくらい頭のどこかが痺れていた。

「用ちゃん、ほら、傷押さえて。救急箱取つてくるから」

言われるがままに傷口を覆うティッシュの上に手を伸ばして。そこには、日の手があつた。

「もつじぎゅっと押さえて」

日の言葉が、近くて遠い。この世のどんな音より私の奥に響いて、なのに言葉の意味がよく分からない。

田の片手が私の左手首を握り、もう片手が私の指を抑え、私はその上から右手を重ね、それはまるで随分と歪に両手を握りあつてゐるようだつた、から。

「田……！」

「つ、月ちゃん？」

私は、傷口ではなく、田の手を、ぎゅうと握りしめていた。

「月ちゃん、痛い……よ……？」

それはもう、本当に力いつぱいで、田の柔らかな手を潰してしまふんじやないかというくらいで、けれど私は手の力を緩めることができなかつた。どうして自分がこんなことをしているかも分からず、ただ手だけがそういう呪いでもかかっているかのように、握りしめていた。

昔何かで読んだ本当かどうかも分からぬ話だが、人間は乾燥状態にある程度以上おかれると、口の中に入つた液体を意思とは無関係に嚥下してしまうという。たとえ毒入りだと分かつていても。

田の指の滑らかさが、僅かに肩口に触れる体の温もりが、甘い香りが、どうしようもなく染みて、沁みて、捕らえるように掴んでいるのは私のはずなのに、私の心はずぶずぶと、ずぶずぶと。

私はさぞや必死な顔をしていたのだろう。多分、他の人が見たら即座に気持ち悪いって吐き捨てるくらいに。でも、田はそんなこと言わずに、猛禽類じみた私の指に与えられているはずの痛みのことも言わずに、そつと、傷ついた方の私の手指に、両手を絡めてきた。完全に、手を繋ぎあう形。

何とも呼びようのない感情に弾かれて顔を上げた私を、田は、腰をかがめてほんの少しだけ上から見下ろし、

「大丈夫だよ、月ちゃん」

紙風船に息を吹き込むように、優しく笑つた。

「こ、ち……」

溶け合つ。ずきり、ずきり、指先で点滅する痛みのリズムに同期して、私たちの心臓は脈打つてゐる。それはずっと久しづりの感覚

で、私は、日の隣なら、と思つてしまつ。

駄目だ、と理性が叫んだ。こつなつては、駄目なのだ。こつなら
ないよ、私は日を拒絶したんじゃないか。ほら、こんなに日の
近くにいたら、また私は、いけないことを考えてしまつて、それを
否定しようと、心が乱されて、乱されて。

乱されていはるはずなのに、私の胸はぱつかりとあたたかかった。
乱されているのではなく、満たされているなんて感じてしまつくな
いに。

日が、私の手を引つ張つて器用に椅子を回し、一人を向かい合わ
せた。

そして、すとん、と。私の膝の上に、跨つて、きた。この近さは、
あの日以来、なかつた近さ。

「もう許してくれたの？」

互いの胸の前で手を重ねながら、息のかかる距離で日が問い合わせ
る。私はその意味が分からぬ。

「何、が……？」

「用ちゃん、あたしに怒つてたんじょ？ だから触るなつて……
違うの？」

困つた顔をされて、私は慌てる。日は、そういう風に受け取つて
いたのか。

「怒つてたんじょ、ないよ」

「そうなの？ よかつたー」

安堵したように表情を崩す日に、私は複雑な気持ちになる。怒つ
てた方が、マシなんじょないのかな。だつて怒つてるだけなら、一
時の感情のせいなら、ちょうど日が言つたように、もう許してしま
う、なんてことがある。でも、私の拒絶はそんなのじやなくて、も
つと、決定的なもののはずなんだ。

「じゃあなんでかは分かんないけど、また用ちゃんと仲良くしてい
いんだよね？ やつたー！」

日が、ギュッと体を押しつけてくる。日の顔が私の肩に乗る。手

が、私のえしい膨らみと日の豊かなそれに挟まる。服に血がついちゃう、ということを心配したのは一種の逃避だつたのだろう。私は日とまた元の関係に戻ることを認めたわけじゃなくて、なのに相変わらず、いやさつきよりっと強く、日の手に縋っている私の体は、認めたも同然だつた。

それでも、駄目なのだ、こんなことは。

間違つてゐる。

魔女に近寄つては、いけない。

「違う、の」

「何が?」

「駄目だよ」

「どうして?」

少しだけ日が顔を引いて、私を正面から見つめる。長い睫毛の数だつて数えられる。瞳孔の収縮するリズムだつて分かる。

「あたし、寂しかったんだよ? 月ちゃんとこうやつてくつつかないと悲しいのに、ちょっと前からなんだか冷たいし、この間はベタベタするなつて言つし……すつぐく、寂しかつた。ダメだなんて、あたしのセリフだよ。あたしは、月ちゃんがいないと、ダメなんだから」

日の唇から、半ば囁くよつて言葉が流れてくる。それは寂しさの告白という悲痛なものだつたかもしれないが、私には、甘く甘く聞こえた。日の、特別。私はそれで、一杯になり、

「月ちゃんは、あたしがいい方がいいの? 何であたしが近付いちゃいけないの?」

艶めいた桜色の動きに、もう、溢れてしまつた。

「キス、したくなつたり、するから」

日はきょとんとして、私は後悔の深い穴に落ちた。

何でことを言つたんだ。これくらいならいいとも思つたか。抱える邪な考えの一部でしかないから許されるとでも思つたか。姑息で、見苦しくて、その上その姑息さは何の緩和効果も發揮していな

い。気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い。どうか日がその一時停止的な表情のまま理解しなければいい。そうじゃないと、日今まで気持ち悪いと思われたら。私は顔を逸らしたくなつて、でもそんな動きすらも躊躇われて、目の前の人を見つめ続ける。

そして。

「いいよ？ そんなこと？ も一月ちゃんつたら照れ屋なんだから」
日は、嬉しそうにくすりと笑つた。嬉しそうだつた？ 他に言いようがない。どう見てもその様子は、嬉しそうだつた。好きな遊びを提案された子供のように、楽しそうだつた。

混乱する。だつて、今、凄く気持ち悪いことを言われて、卑しいことを言われて、なのにどうして嬉しそうにするの？ 日、あなたは、一体。

「じゃーしたいつて言つた用ちゃんからね！」

日は田を閉じた。私だつて分かる、それはキスを待つ姿だ。本当にこの子は、拒まない氣でいる。私に全て委ねている。

私、私、は。頭の中がグチャグチャだ。邪な私が、この機を逃すなんてできないとほくそ笑む。もう少ししまともな私が、まだ引き返せると叫ぶ。冷めたふりの私が、引き返したところで何があるの、なんて呟く。

そう、何があるんだろう。日の隣だけが私の居場所だつた。引き返したつて、田から離れてしまつたら戻るべき場所なんてないのだ。空の月と違つて私は満ち欠けをしない。ずっと欠けたまま。それは安定ではあつても、幸せと呼びたくはなかつた。呼ぶつもりだつたけれど。こつして日に触れてしまつたら、もう一度満ちてしまつたら、欠けたくないと望んでしまつ。それなら、このまま、顔を？
いや、やはりいけない。日は親愛のキスを予想していて、しかし私のしようとしている物は違う。もっと汚い、もっと先を望む、そんな接吻だ。日にそんなことをしてはならないのだ、絶対に。守るべき一線というのは、確かにある。それを守つた先に何もないとしても。

逡巡は長いのか短いのか分からなかつたが、きっと長かつたのだろう。す、と日が目を開けた。はい、これで私が邪な願望を叶える機会はおしまい。また、日と私は別々の人間として生きる。

日は拗ねたように口を尖らせた。いつの間にか力の緩んでいた私の手から自分の手を抜き取り、

「もー、つーちゃんのビビリーー」

私の頭の後ろに回し、日の顔が急に視界の中で大きくなつて、互いの目を覗き込んだまま、私たちは

「ん……」

記憶にあるどんなものよりもやわらかな熱を、感じた。

「んふ」

きゅ、と大きな大きな日の目が弧を描き、それでも私はやわらかさを覚えこまされるように感じていた。す、と頭を一つ撫でられ、日が離れる。確かめるように舌で自分の唇を舐める下品な仕草を止められたのは、奇跡のおまけだった。

「次はつーちゃんからだからね」

そう言つて少しだけ照れたように頬を染める日は、あまりに無邪氣に見えた。生まれた時に全ての邪さを私が受け持ち、日は一切の穢れを捨てたのかもしれない。そんなことあるわけないと思つても、そうとしか感じられなかつた。

「あ、つーちゃん逃げちゃいそつだから、今してよ、今」

そう言つて再び目を閉じる日の口元は、やっぱり笑みの形。

私の中で、やわらかな熱が反響していた。してしまつたのだ。キスを。初めてだつたなあ、なんて間の抜けたことを思つ。日からしたら仲良しの証の口付けかもしれない。でも私にとつては全然違つた。私は日の味を知つてしまつた。体中の血管に神経に筋肉に骨に、日が行き渡つてしまつた。暴力的なまでの安らぎを知つてしまつた。こんな幸せだつたこと、今まで一度もなかつた。この幸せが一度きりの物だなんて、耐えられそうになかつた。

守らなければいけない一線を簡単に越えてしまつて、私はどこま

で行ってしまうのだろ？。自分でも予想がつかないよ、田。それで
もいいの？ 田はどこまで分かっているのだろう。私の邪さを知つ
て笑っているの？ 知らないで笑っているの？

全然分からなくて、ただ、もう抜けられないことだけが分かって
いた。

「日、好き、だよ」

「ん

完璧なほど愛しい人に唇を重ね、存在までが重なつている感覚に
陥る。

この居場所を、一度と手放せない。
私は、ずっと、田と、ずっと。

(後書き)

お読みいただきありがとうございました。感想・評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9859x/>

二人で明りを灯す場所

2011年10月29日03時10分発行